OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ
大体大
第45号
発行責任者
大阪体育大学広報室
室長　大坪康巳
編集長
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）453－7021
FAX（072）453－8818
協力＝教育後援会・学友会

全学年一つに 12連覇!!

12連覇を達成し12回胴上げされる楠本繁生監督

ハンドボール部女子

全日本学生ハンドボール選手権大会

ハンドボールの高松宮記念杯男子第68回・女子第61回全日本学生選手権大会が11月、金沢市で行われ、ハンドボール部女子は決勝で筑波大学を35―23（前半20―10）で降し、最長連覇記録をさらに更新する12連覇（13回目優勝）を達成した。

ハンドボール部女子は1回戦からの5試合を通じて、ディフェンスの中央で加藤真央（スポーツ科学部1年、千葉・昭和学院高校）、中尾藍（スポーツ科学部2年、京都・洛北）が長身を活かして守りの中心となってリズムをつかみ、得意の速攻につなげた。再三の好守を見せたGK比嘉楓（かえで、体育学部4年、沖縄・那覇西高校）、決勝で11得点を挙げた奥山紗彩（さあや、体育学部4年、大阪・四天王寺高校）、主将の高来葵美（たかぎ・あいみ、体育学部4年、石川・小松商業高校）ら4年生と下級生の力が融合した。

表彰式では、優秀選手賞に中尾、加藤、比嘉、奥山、坂下碧（みどり、体育学部4年、富山・高岡向陵高校）が、特別賞に小林実杜（みと、体育学部4年、大阪・四天王寺高校）が選ばれた。

ハンドボール部女子は2018年に男女を通じた新記録となる6連覇を達成。以後も最長連覇記録を更新し続けている。多くの競技で関東の優勢が際立つ大学スポーツの中で、特筆すべき偉業と言える。

なぜ、大阪体育大学は強いのか。楠本繁生監督が強みとして挙げるのが、伝統の力に基づく選手の高い意識だ。「先輩が結果を残してきたことを後輩たちは見ている。自分たちもこのステージに上がりたいという思いがある。だから、日ごろの練習を含めて『これで勝てるのか』『もっと自分が高まらないとあかん』という高い意識を持っている。大体大には、先輩が残したものを背負う重たさがあり、伝統や絆がチーム全体の雰囲気と力を引き上げている」と話す。

【楠本繁生監督の話】「12連覇という数字よりも、今年、優勝できたことのほうが大きい。学生スポーツなので1年1年、選手が変わる。毎年新しいチーム、新しい選手と向き合いながらやってきた。

【高来葵美主将の話】「部員49人が1人も欠けることなく、全員の力がなかったら優勝できなかった。来年も後輩に連覇をつないでほしい」

高来葵美（体育4年、石川・小松商業）

中尾藍（スポーツ科学2年、京都・洛北）

加藤真央（スポーツ科学1年、千葉・昭和学院）

比嘉楓（体育4年、沖縄・那覇西）

ハンドボール部女子

楠本監督退任、後任に吉本氏
ラスト采配の日本選手権は4強

ハンドボール部女子の楠本繁生監督が1月末で退任することが決まった。最後の公式戦となった第77回日本ハンドボール選手権大会（広島市）では、リーグH勢を連破し、3年連続でベスト4に進出した。

退任する楠本繁生監督

楠本監督は、退任後は日本選手権で優勝したリーグH・ブルーサクヤ鹿児島の監督に就任。大阪体育大学ハンドボール部女子でアドバイザーを務める。また、吉本遼（はるか）コーチが後任の監督に就任する。

吉本遼コーチ

楠本氏は1987年、大阪体育大学を卒業し、京都府立洛北高校ではインターハイで7回優勝。2010年、大阪体育大学ハンドボール部女子の監督に就任し、全日本インカレで12連覇を含む13回の優勝を果たした。また、2021年秋から2024年4月のパリ五輪世界最終予選まで、女子日本代表「おりひめJAPAN」の監督を務めた。

吉本氏は大阪体育大学ハンドボール部男子出身。大学4年だった2016年11月から大阪体育大学浪商中学ハンドボール部コーチとしてチームを指揮し、2023年の春の全国中学生ハンドボール選手権大会、全国中学校ハンドボール大会など全国大会で4回優勝。2025年4月から大学ハンドボール部女子コーチに就任した。

日本選手権は、1回戦で高岡向陵高校に快勝した後、2回戦でリーグHのアランマーレ富山を28−24、準々決勝でイズミメイプルレッズ広島を28−25で降し、準決勝でベンチ入りメンバー15人のうち6人が卒業生のハニービー石川と対戦。健闘したが、コンタクトの激しいリーグH勢との連戦で体力の消耗も激しく、23−25で敗れた。

楠本監督は退任にあたり、「大学の16年間でいい選手と出会い12連覇も達成できたが、前年と同じやり方をしたことは一回もない。若い指導者の強い意思や熱量を感じ、自分自身も変わるチャンスだと考えて、思い切ってバトンタッチすることにした」と話している。

小林実杜（体育4年、四天王寺）

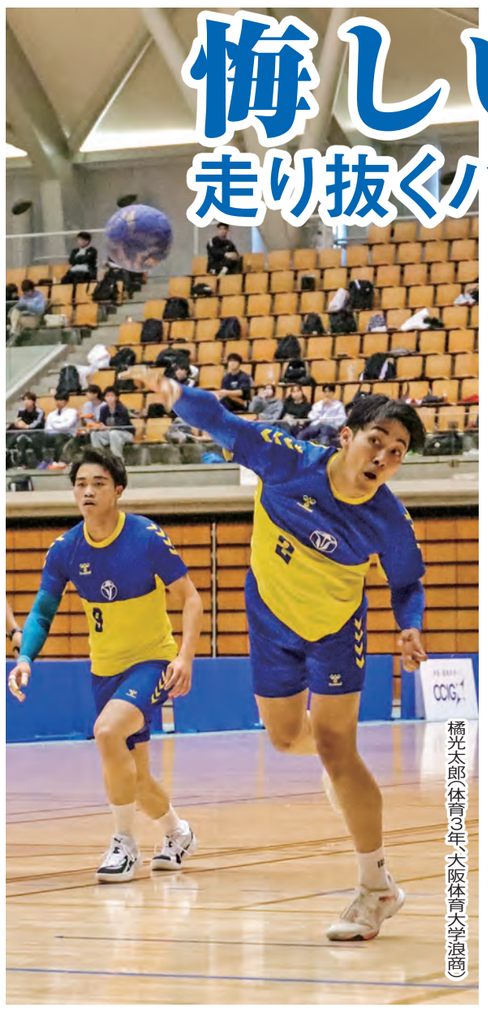
奥山紗彩（体育4年、大阪・四天王寺）

ハンドボール部男子

悔しい8強
走り抜くハンド実らず

全日本学生ハンドボール選手権大会／日本ハンドボール選手権大会

ハンドボール部男子は11月の全日本インカレ準々決勝で敗れ、ベスト8。3大会ぶりに準決勝進出を逃した。12月の日本選手権は2回戦で敗れ、ベスト16だった。


橘光太郎（体育3年、大阪体育大学浪商）

インカレは1回戦で立教大学を45−22、2回戦で早稲田大学を41−37で降し、準々決勝では関東2位の日本大学と対戦した。

本学は橘光太郎（体育学部3年、大阪体育大学浪商高校）が5得点を挙げたが、27−34（前半11−15）で敗れた。

今季は西日本インカレ準決勝で関西学院大学に敗れた。リベンジをかけて臨んだ関西学生秋季リーグで関学大を降し、3季連続86回目の優勝。その勢いでインカレに臨んだが、6大会ぶりとなる優勝は果たせなかった。

東藤大成主将（体育学部4年、香川中央高校）は「全員が走り抜き、しんどくなったら、うちはベンチにいい選手が多いので交代するという作戦だったが、相手が一枚上だった」と振り返る。「4回生の代が活躍できず、下の学年の竹下（颯斗、体育学部3年、大阪体育大学浪商高校）、橘らに負担をかけた」と悔やんだ。

東藤大成（体育4年、香川中央）

日本選手権は1回戦で、8月のジャパンオープン優勝の社会人クラブチーム・FOGと対戦。34−33（前半16−16）で競り勝った。

2回戦はリーグHの福井永平寺ブルーサンダーと対戦。堀洸志郎（体育学部3年、高知中央高校）の9得点など攻撃は38点と健闘したが、守り切れずに38−46（前半13−23）で敗れた。

実業団のフィジカルに屈したかたちとなり、下川真良監督は「日本のトップを目指すぐらいの強い意思を持ち、体作りから始めないと、リーグHとは戦えない」と振り返る。

一方で1年生の石原直弥（ちかや、スポーツ科学部、沖縄・那覇西高校）が5得点を挙げるなど光明も見えた。来季の巻き返しが期待される。

下川陽向（体育4年、大阪体育大学浪商）

堀洸志郎（体育3年、高知中央）

村山倖輝（体育4年、沖縄・那覇西）

武田琉星（体育3年、香川中央）

硬式野球部男子

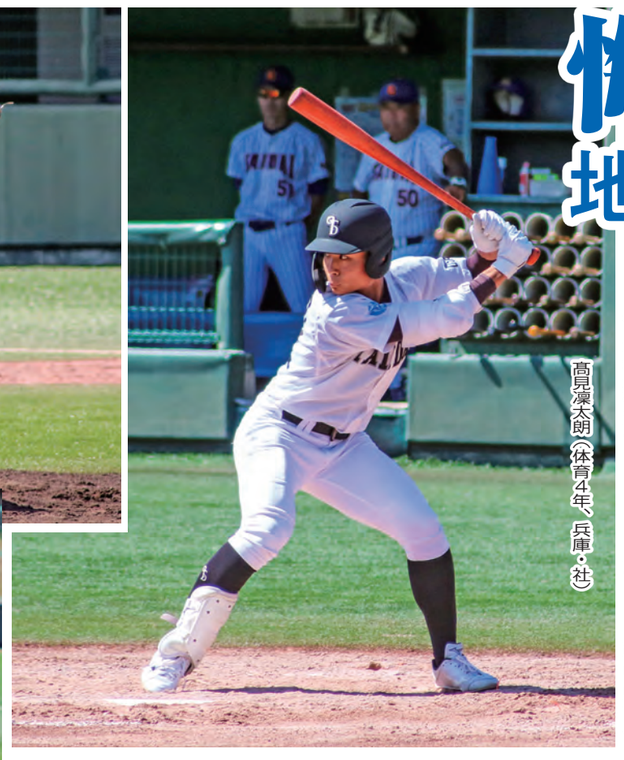
悔しい5位
地力活かせず

硬式野球部男子は阪神大学秋季リーグで春から1つ順位を下げ、4勝6敗で5位と悔しい結果に終わった。

阪神大学野球秋季リーグ
高田純誠（体育3年、兵庫・報徳学園）

苦戦の原因は打撃。春の主力が引退した影響もあり、特に4番が固定には至らなかった。

一方、投手陣は本格派のエース高田純誠（体育学部3年、兵庫・報徳学園高校）が春以降、制球力が向上。球威のある中野陽生（体育学部3年、大阪体育大学浪商高校）と2人で先発を務めた。


高見凜太朗（体育4年、兵庫・社）

リーグ戦は、初戦は3−0で快勝したが、以後は下位となった相手に3連敗。リーグ戦10試合で15失策と勝負所で守りが乱れた。一方で優勝した大阪産業大学、2位の天理大学から勝ち星を挙げたのは、両大学を除くと大体大だけ。地力はあるだけにミスによる敗戦が痛かった。

また、リーグ戦に出場していない1〜3年生を対象に10〜11月に開催されたフレッシュリーグでは、A、B2チームが出場。大体大Aは準優勝、大体大Bはベスト8と健闘した。

来季に向け、投手陣は、高田に続く先発の座を秋に先発した中野のほか、日浦颯斗（はやと、スポーツ科学部2年、兵庫・神戸第一高校）、福富龍之介（同、金光大阪高校）、渡邊陽軌（はるき、同、大阪・履正社高校）らが争う。野手は春秋連続ベストナインで打力が高い齋藤智也（体育学部4年、岡山・玉野光南高校）が抜ける穴を小川輝（ひかる、教育学部2年、大阪・履正社高校）、打球速度が際立つ神永悠希（スポーツ科学部1年、栃木・佐野日本大学高校）らが埋めることができるか。

新主将は2022年夏の甲子園で準優勝した山口・下関国際高校で主将だった山下世虎（せとら、体育学部3年）が務める。松平一彦監督は「就任3年目となる来季こそ全国を狙いたい」と話す。

北尾太一（体育3年、兵庫・須磨翔風）

福地基（体育4年、埼玉・昌平）

平林直（体育4年、市立和歌山）

陸上競技部

西日本学生陸上競技対校選手権大会／関西学生陸上競技種目別選手権大会

西日本3人表彰台 関西種目別7人V

陸上競技部は、9月の西日本インカレで3人が表彰台に立つなど男女各6人の12人が入賞した。また、10～11月の関西学生種目別選手権では、7人が優勝、18人が表彰台に立つなど35人とリレー1組が入賞した。

三和龍之介（体育3年、兵庫・社）

川合小想（体育4年、三重・松阪商業）

鈴木陸人（体育4年、北海道・帯広農業）

西日本インカレでは、女子砲丸投げで坂ちはる（スポーツ科学部1年、大阪体育大学浪商高校）が15メートル44で優勝した。女子ハンマー投げの川島空（体育学部3年、大阪体育大学浪商高校）は59メートル50で2位。自己ベストの57メートル88を大幅に更新すると同時に、大阪体育大学記録の59メートル41も超え、「ここ一番でようやく一本が出た」と振り返る。男子砲丸投げの黒田翔貴（大学院博士前期課程2年、兵庫・伊川谷北高校）は16メートル29で2位に入った。

このほか、男子では十種競技で三和（みわ）龍之介（体育学部3年、兵庫・社高校）が自己ベストの6930点で5位に入り、「体大の十種の3人で来年の日本インカレに出るため、A標準記録を突破したかった」。棒高跳びでは、山本湧斗（ゆうと、体育学部3年、兵庫・明石商業高校）が5メートル00で4位。砲丸投げは濱田茉裕（まひろ、教育学部3年、三重・松阪商業高校）が14メートル79で7位。やり投げは、鈴木陸人（りくと、体育学部4年、北海道・帯広農業高校）が70メートル08で4位、須藤勇大（ゆうだい、体育学部4年、群馬・前橋育英高校）が69メートル31で5位に入った。

武田光里（体育3年、奈良・添上）

女子は、砲丸投げで武田光里（ひかり、体育学部3年、奈良・添上高校）が14メートル12で5位、中原鈴（体育学部3年、東大阪大学敬愛高校）は13メートル91で7位。ハンマー投げは藤田唯愛（ゆあ、スポーツ科学部2年、松阪商業高校）が55メートル61で6位。やり投げでは川合小想（こころ、体育学部4年、松阪商業高校）が48メートル77で6位入賞した。

また、関西学生種目別選手権では、男子は十種競技で三和、砲丸投げで黒田、円盤投げで志手奏太（して・そうた、スポーツ科学部1年、大阪体育大学浪商高校）、やり投げで須藤が優勝。女子は砲丸投げで坂、ハンマー投げで川島、やり投げで川合が優勝した。

川島空（体育3年、大阪体育大学浪商）

黒田翔貴（大学院博士前期課程）

水上競技部

吉本、快挙の入賞 関西は松山V

日本選手権（25メートル）水泳競技大会

水上競技部女子にとって収穫の多い年だった。10月の日本選手権（25メートル）で吉本早希（スポーツ科学部2年、和歌山・笠田高校）が100メートル、50メートル平泳ぎで6、8位と、部として久しぶりの入賞。8月の関西学生選手権では松山優杏（ゆあん、スポーツ科学部1年、兵庫・神戸野田高校）が100メートル自由形で優勝し、高野朱理（あかり、スポーツ科学部1年、富山・高岡第一高校）が200メートル個人メドレーで3位。4×100メートルフリーリレーでも2位となった。

松山優杏（スポーツ科学1年、兵庫・神戸野田）

吉本早希（スポーツ科学2年、和歌山・笠田）

女子　吉本は9月の全日本インカレの100メートル、200メートル平泳ぎで自己ベスト。100メートル平泳ぎはあと0・23秒でA決勝を逃したが、部として個人種目では久しぶりのB決勝に進み10位。日本選手権（25メートル）もその勢いをつなげ、2種目で入賞した。

吉本は中学2年で自己ベストを出し、その後伸び悩んだが、「このまま高校で水泳を終えるのは悔しい」と大体大に入学し、記録を伸ばした。浜上洋平監督は「平泳ぎはフォームが少しでも崩れるとタイムがすぐに落ちる繊細な種目だが、吉本選手は自分の泳法を理解し、自己修正していく能力がすごい」と語る。

松山はアーティスティックスイミング（AS）から転向した異色の選手で、競泳歴はまだ3年。ASで水をとらえる感覚を養い、1ストロークで進む距離が他の選手とまったく違う。

高野は根気強く、迷わずひたむきに練習に取り組む姿勢が目立つ。

水上競技部女子は全国の強豪大学で男女合同の練習が主流を占める中で、女子だけの練習で女子選手に合った泳法やトレーニングをきめ細やかに指導している点が特長だ。

浜上監督は次年度に向けて、「部員全員の自己ベスト更新を目指したい」。きめ細やかにしなやかに、今シーズンの上げ潮ムードを次年度につなげていく。

田中拓紀（体育4年、岩手・盛岡北）
宗石星流（体育4年・高知商業）
中川凌太（体育3年、大阪・桃山学院）
上甲陽輝（スポーツ科学2年、向陽台）＝左から

上甲陽輝（スポーツ科学2年、向陽台）

2種目でB決勝 上甲、中川ら健闘

日本学生選手権水泳競技大会

水上競技部男子は9月の日本インカレの800メートルフリーリレーでは、予選14位でB決勝に進出し、7分29秒64で7位。200メートルバタフライの中川凌太（体育学部3年、大阪・桃山学院高校）もB決勝で2分0秒01を記録し7位。尾関一将監督は「800メートルフリーリレーの予選14位は近年でもっとも良い順位。他にも健闘した種目が多く、収穫が多かった」と振り返る。

男子　800メートルフリーリレーB決勝では、アンカーの上甲陽輝（はるき、スポーツ科学部2年、向陽台高校）が自己ベストの1分49秒86をマーク。B決勝の出場選手で2番目、200メートル自由形では8位に相当する好タイムだった。ボディポジションが高く、柔らかいストロークで上下動の少ない泳ぎが持ち味。今季は練習により前向きに取り組み、大幅に成長した。

中川は200メートルバタフライ予選では1分59秒34で13位。テンポが良く、後半に強い点が持ち味で、近畿大学や福岡大学との長水路での合同合宿を通じて成長した。11月のジャパンオープン予選でもB決勝（16位以内）まであと一歩の17位と健闘した。

また、宗石星流（せな、体育学部4年、高知商業高校）は100メートル平泳ぎ予選で自己ベストの1分1秒80を記録し、B決勝まであと一歩の17位。測定のため大体大を訪れたパリ五輪平泳ぎ代表の谷口卓選手にアドバイスを受け、それを機に記録が向上したという。

また、400メートルメドレーリレー予選は上甲、中川、宗石に背泳ぎの田中拓紀（ひろき、体育学部4年、岩手・盛岡北高校）を加えたメンバーで臨み、3分44秒23でB決勝まであと一歩の17位だった。

水上競技部男子は、他大学では選手がスイミングクラブで練習することも多い中で、大学のみで練習し、チームワークを高めている点が特長だ。新チームは、ひたむきに努力する新主将の井上輝星（きら、体育学部3年、福井工業大学附属福井高校）の下、「インカレでのリレーA決勝、選手3割の自己ベスト更新」を目標に、さらなる飛躍を目指している。

川島康弘部長からねぎらわれる
井上、高野朱理（スポーツ科学1年、富山・高岡第一）

井上輝星（体育3年、福井工業大学附属福井）

バスケットボール部 女子

悔しい16強
来季こそ「泥臭く勝つ」

全関西大学女子バスケットボールリーグ／全日本大学バスケットボール選手権大会

バスケットボール部女子は全日本インカレ2回戦で拓殖大学に66―83で敗れ、昨年と同じくベスト16。村上なおみ監督は「チーム全体がベスト4進出をイメージしていたが。難しい」と悔やむ。

春の全関西大学女子選手権大会は5連覇を逃がし、4位。全関西大学女子リーグは2位。それでもチームは、三次真歩（みつぎ・まほ、体育学部3年、広島皆実高校）、アィェビドゥン・グレイス（体育学部3年、岡山・倉敷翠松高校）を軸に、ディフェンスを固めてオフェンスにつなぐ体大のバスケを貫き、関東の強豪とも十分に戦える自信を持って、インカレに挑んだ。

1回戦は立命館大学を54―42で降した。

2回戦の相手の拓殖大学は、攻守の切り替えが速く、強力な留学生を擁する。チームは男子に協力してもらい、練習で拓大対策を積んだ。

試合では、第1クォーターは24―22とリード。第2クォーターも19―19。シュートも練習通りよく決まり、出だしは良かった。

しかし、第3クォーターで相手がゾーンDFに切り替えると、足が止まった。この策への準備はしていたのだが、速やかに対応できず、DFが甘くなって第3クォーターで15―23と逆転。第4クォーターで8―19と差を広げられた。

来季は、最終学年となる大黒柱の三次、グレイスに加え、ポイントゲッターの大上粋奈（おおうえ・きよな、スポーツ科学部2年、広島皆実高校）が軸となる。

また、シューターの木谷夢菜（スポーツ科学、京都両洋高校）、今季はけがで出遅れたオヤレタ・フェイバー（スポーツ科学部、鳥取城北高校）、末永瑠奈（スポーツ科学部、大分・明豊高校）ら1年生も成長著しい。

村上監督は「技術や個々のレベルは当然上げたうえで、泥臭さをいかに練習で身につけることができるか。すべての答えは練習にある」と巻き返しを誓っている。

アィェビドゥン・グレイス（体育3年、岡山・倉敷翠松）

三次真歩（体育3年、広島皆実）

河井七美（体育4年、奈良文化）

伊藤七海（体育4年、千葉経済大学附属）

大上粋奈（スポーツ科学2年、広島皆実）

バスケットボール部 男子

『1部復帰』目標完遂
2か年計画『来季はV』

関西学生バスケットボールリーグ

バスケットボール部男子は9～10月の関西学生リーグ（2部）で2位となり、入替戦で関西学院大学を2勝1敗で降して、1シーズンでの1部昇格を果たした。

チームは2部降格が決まった2024年「1年目に1部復帰、2年目にリーグ優勝とインカレ出場」の2か年計画を立てた。

けがが多発した前年を反省。下半身のトレーニング量を増やしてけがをしない体づくりを目指した。

2部リーグは、1次リーグ10勝1敗、2次リーグ2勝1敗で2位。関西学院大学との入替戦は、学生スタッフが相手の戦術や選手個人のプレーヤーフォーカスをしっかり分析し、選手は自信を持ってゲームに臨めたという。

第1試合はディフェンスに課題が出て勝っている試合を逆転されて86―87で落とす。第2試合はディフェンスを修正し、3度の延長の末、96―84で振り切り、第3試合は思い通りの内容で98―80と快勝。主将の南口皐（こう、体育学部4年、大阪高校）は「1部復帰を目標に取り組んだトレーニングや走り込みが、最後に目に見えて結果につながった。自分たちが目標を達成できる遂行力のあるチームだということを証明できたことがうれしい」と語る。

2か年計画で優勝がかかる来季は、チームのインサイドの要のリヴァース怜央（体育学部3年、大阪・藤井寺高校）、リーグ戦からポイントガードに抜てきされた清見悠人（はると、教育学部2年、京都・東山高校）らに期待がかかる。比嘉靖監督は「継続して体づくり、コンディショニングづくりに取り組み、フィニッシュ力を今以上に磨く」と話している。

山城颯（スポーツ科学2年、沖縄・美来工科）

リヴァース怜央（体育3年、大阪・藤井寺）

川原流彗（スポーツ科学2年、徳島・海部）

山田大智（体育4年、和歌山・初芝橋本）

南口皐（体育4年、大阪）

バレーボール部

チーム成長の1年
関西3位・全国16強

関西大学バレーボール秋季リーグ／全日本バレーボール大学女子選手権大会

バレーボール部女子は、9～10月の関西大学秋季リーグ1部を6勝5敗、5位で終えた。11月の関西大学男女選手権大会は、準決勝で帝塚山大学に敗れ3位。12月の全日本大学女子選手権大会ではベスト16に進出。長江晃生監督は、「チーム全体のレベルが底上げされ、準備してきたことが実を結んだ」と評価する。

女子 リーグ戦では、セッターの木下碧海（あおい、スポーツ科学部2年、長崎・純心女子高校）のトスが攻撃陣をうまく活かした。黒木陽奈（くろぎ・ひな、体育学部3年、宮崎・都城商業高校）は高い攻撃力を発揮。スパイク賞を受賞し、個人技術ランキングのアタック決定率で1位だった。チーム技術ランキングでは、アタック決定率、アタック決定本数、ブロック決定本数でそれぞれ2位となった。

関西インカレでは、1回戦から準々決勝まで、姫路獨協大学、関西学院大学、神戸親和大学を相手に1セットも許さず快勝を続けた。準決勝で今大会優勝校の帝塚山大学に敗れ惜しくも3位だったが、昨年のベスト8から着実に成績を伸ばした。

全日本インカレでは、1回戦の江戸川大学戦と続く中国学園大学戦で3―0で勝利をつかみ、3回戦で前回王者の筑波大学と対戦。2セットを連取された後、第3セットを奪い返し意地を見せたが、第4セットで及ばず悔しくも1―3で敗れた。目標としていたベスト4には届かなかったものの、ベスト16進出を果たした。これまで、キャプテンの松永あやめ（体育学部4年、愛媛・済美高校）、攻守の要の徳永優奈（ゆな、体育学部4年、福岡・誠修高校）、アナリスト兼コーチの宮内こころ（体育学部4年、誠修高校）ら4年生が中心となりチームを支え、牽引してきたことも大きく貢献した。

長江監督は、「チームは持ち前の高い攻撃力に加え、守備力も強みとして定着しつつある。文化として代々引き継いできたバトンを次の世代が引き継ぎ、当たり前のレベルをさらに上げていきたい」と確かな手応えに期待を寄せ、春季リーグ1部での優勝を目指す。

木下碧海（スポーツ科学2年、長崎・純心女子）

須藤舞尋（教育1年、宮崎・延岡学園）

徳永優奈（体育4年、福岡・誠修）

太田花菜（スポーツ科学1年、岡山・山陽学園）

黒木陽奈（体育3年、宮崎・都城商業）

惜敗の秋3位
悔しさ糧に春は全勝で1部復帰へ

関西大学バレーボール秋季リーグ

バレーボール部男子は、9～10月の関西大学秋季リーグ2部は3位で、1部昇格を逃した。個人賞では、宮下翔（つばさ、スポーツ科学部1年、京都・東山高校）が新人賞を受賞した。

男子 1次リーグは6勝1敗の2位で終え、4チームによる上位リーグに進んだ。上位リーグ初戦の桃山学院大学戦は、レシーブで食らいつき最終第5セットの終盤まで競り合ったが、2―3で惜敗。続く佛教大学戦は、3―1で勝利。1次リーグ唯一の敗戦を教訓に、最後まで安定してボールをつなぎ、チームワークで勝ち切った。

最終戦の関西学院大学戦は、1、2セットを先取後、第3セットで一進一退のデュースが続いたが、30―32で逆転され、第4セットも落とす。最終第5セットも18―20と最後まで拮抗したが、2―3で惜敗。あと一歩勝ち切れず、目標としていた1部昇格には届かなかった。

チーム技術ランキングではサーブ効果率が1位、サーブレシーブ成功率は3位になり、重点的に取り組んだ成果が出た。主将の松浦和真（かずま、体育学部4年、岩手・南昌みらい高校）はエース不在の中でチームをまとめ、安定したレセプションで攻撃へとつなげた。

新人賞を受賞したオポジットの宮下翔は、中心選手として期待される。また、アナリストの酒井耀（よう、体育学部4年、兵庫・三田西陵高校）と宮部陽輝（はるき、教育学部1年、滋賀・光泉カトリック高校）が専用ソフトを活用したデータ戦略が徐々に浸透してきたという。沼田薫樹監督は「チームは目標の『応援されて勝つチーム』として確実に成長している。一方で、高さがなく決定力不足が顕著で、来季はレシーブを軸とした守備力強化を絶対条件にアタック率の向上も必須となる」と話し、春季リーグでの全勝での1部復帰を目指す。

高岡航輝（スポーツ科学2年、神戸学院大学附属）

松浦和真（体育4年、岩手・南昌みらい）

出水充希（体育4年、大阪・大商学園）

松原立征（スポーツ科学2年、岐阜・大垣商業）

BFA女子野球アジアカップ

侍ジャパンに最多5人 アジアカップ4連覇

第4回BFA女子野球アジアカップが10～11月、中国・杭州で行われ、日本が4連覇を果たした。侍ジャパン女子日本代表はオール大学生で編成され、大阪体育大学から最多の5人が出場し、日本代表をけん引した。

© WBSC

日本代表に加わったのは、エースの柏崎咲和（かしざき・さわ）投手（体育学部4年、福井工業大学附属福井高校）、日本チーム主将の山本一花（いちか）捕手（体育学部4年、大阪・履正社高校）、木村睦実（むつみ）一塁手（体育学部4年、京都両洋高校）、畑中ゆりあ二塁手（体育学部4年、埼玉・花咲徳栄高校）、荒川莉子遊撃手（体育学部3年、鹿児島・神村学園高等部）と日本代表コーチを務めた横井光治監督（教育学部准教授）。

日本は決勝で台湾を8―0で降し、7戦全勝だった。

柏崎は初戦、決勝で先発し、12回を投げて防御率0・00で2勝を挙げ、最優秀選手と最優秀防御率を獲得。フル代表だった前回のアジアカップは最終選考で代表から漏れ、オーストラリア留学などで自分を鍛え直した。

畑中は19打数15安打、打率7割8分9厘と打ちまくり、首位打者と最多得点（12点）、ベストナインを獲得した。8月の全日本インカレでは不調で、横井監督と相談し「このままJAPANのユニホームを着ていいのか」と涙を流したが、復調した。

山本は正捕手として投手陣をリードしベストナインを獲得するとともに、主将としてチームをまとめ、「試合を重ねる中でチームが一つになっていくことを実感した」と振り返る。

木村は打球速度、飛距離はチームでも飛び抜け、出場選手中2位の12打点を挙げた。

唯一の3年生の荒川はショートの守備力を高く評価され、重要な場面で起用された。

2026年にはワールドカップのグループステージ、2027年にはファイナルステージが開催される。MVPの柏崎は「大学では日本一になれなかったが、学生最後のアジアカップで最高の仲間と最高の瞬間をつかむことができた。日本代表は、自分が目標とすべき場所であることを再確認できたので、次も選んでもらえるよう頑張っていきたい」と話している。

柏崎咲和（体育4年、福井工業大学附属福井）
© WBSC

山本一花（体育4年、大阪・履正社）
©WBSC

畑中ゆりあ（体育4年、埼玉・花咲徳栄）
©WBSC

硬式野球部女子

無念のインカレ4強 全日本ではクラブ王者倒す

硬式野球部女子は、8月の全日本インカレでは準決勝でIPU環太平洋大学との延長八回タイブレークの末、3―4で敗戦。明治神宮野球場で初開催される決勝への進出を果たせず、横井光治監督は「後悔しかない」と悔やむ。

松永菜々夏（体育4年、京都両洋）

硬式野球部女子は予選リーグB組を1勝1分けで1位通過し、決勝トーナメントは1回戦で東海大学静岡キャンパスに13―4、準々決勝で尚美学園大学に延長八回タイブレーク4―2で勝ち、準決勝に進んだ。

横井監督が誤算として挙げたのが予選リーグ・新潟医療福祉大学戦の2―2の引き分け。一回に2点を失い、温存予定の柏崎を二回から投入せざるを得なかったうえ、ポイントが伸びずにシードを逃がし、1回戦からの出場となった。結果的に、柏崎は予選で2日連投、1日はさんで3日連投となり、準決勝の延長八回、無死満塁から2犠飛を許してサヨナラ負けした。

一方、女子硬式野球日本一を争う10月の全日本選手権では、初戦の2回戦で福知山成美高校を5―0で降し、準々決勝では全日本クラブ選手権優勝で、侍ジャパン女子の中島梨紗監督が率いるZENKO BEAMSと対戦。柏崎の後を六回から谷蒼依（あおい、教育学部1年、京都外大西高校）が好救援して1―0で勝利。準決勝は神戸弘陵高校に2―3で敗れたが、横井監督は「3位という結果とは別に、強いクラブチームに好ゲームで勝てたことは、選手の自信につながる」と評価した。

来季はバッテリー、クリーンアップが変わる。投手陣は、左腕からの球の出どころが見にくいスローカーブが武器の都京香（スポーツ科学部2年、鹿児島・神村学園高等部）、120キロ台と球威がある谷、春の全日本インカレで好投した清井結月（ゆづき、スポーツ科学部1年、兵庫・蒼開高校）が競う。クリーンアップは正捕手を狙う今井実（みのり、教育学部2年、岐阜第一高校）、一塁手候補の近藤りな（スポーツ科学部2年、福井工業大学附属福井高校）、野上晴香（スポーツ科学部2年、大阪・履正社高校）らが競り合う。

全日本大学女子硬式野球選手権大会
全日本女子硬式野球選手権大会

児玉花姫（スポーツ科学3年、福井工業大学附属福井）

後藤優華（体育4年、北海道・札幌手稲）
木村睦実（体育4年、京都両洋）

体操競技部

福島快挙 全日本（ゆか）3位

全日本体操種目別選手権／全日本学生体操競技選手権大会

体操競技部男子は11月の全日本種目別選手権で、福島琉斗（スポーツ科学部1年、大阪体育大学浪商高校）がゆかで14・000点をマークし3位となる快挙。山﨑海音（かいと、スポーツ科学部1年、鹿児島・出水商業高校）も跳馬で8位入賞。8月の全日本インカレ団体総合は昨年に続いてベスト8入り、名門・筑波大学の上を行く7位となった。

福島琉斗（スポーツ科学1年、大阪体育大学浪商）

男子　2024年からのルール改正で、着地がより重視されるようになったことが追い風になったという。福島は丁寧に演技できる点が持ち味。他種目と違って着地が多いゆかで、一つ一つの着地をピタリと決めた。藤原敏行監督は「日本のトップ3という素晴らしい結果。ゆかを自分の武器にするとともに、6種目すべてで高いレベルを持つオールラウンダーとして成長してほしい」と期待する。

山﨑は全日本インカレの団体メンバーに1年生で唯一加わった。まだ粗削りだが、全身の瞬発力など運動能力の高さを活かして全種目で高得点を狙える逸材で、自ら「オリンピックを目指して体大に進んだ」と話す。

また、エースの築山翔馬（体育学部4年、相生学園高校）は、インカレでは個人総合6位、種目別ゆかで2位。5月の西日本インカレでは創部初の個人総合2連覇を果たし、地力の高さを見せた。

チームとしては、西日本インカレで初の団体総合2連覇を果たし、全日本インカレ団体総合は7位。藤原監督は「西日本インカレでは部として大きな足跡を残した。全日本インカレはもう少し上の目標を狙っていたのは事実であるが、ベストを尽くした結果として受け止め、今後の成長につなげたい。」と振り返る。

来季に向け、新主将の鈴木琉偉（るい、体育学部3年、福井・鯖江高校）はチームの目標として「全日本インカレ5位」を掲げた。確実に今季からの一歩前進を目指す。

鈴木琉偉（体育3年、福井・鯖江）

奥田拓哉（スポーツ科学1年、愛媛・新田）
山﨑海音（スポーツ科学1年、鹿児島・出水商業）

体操競技部

無念の降格 1年で1部復帰目指す

全日本学生体操競技選手権大会

体操競技部女子は春の関西学生選手権で団体総合2連覇、西日本学生選手権で僅差の2位と順調だったが、8月の全日本インカレは昨年の6位から10位に順位を下げ、2021年以来となる2部に降格。田原宏晃監督は「インカレは厳しい試合になったが、1年で1部復帰を目指す」と話す。

女子　全日本インカレは1年生の楢村莉菜（スポーツ科学部、大阪体育大学浪商高校）が個人総合36位、1か月前の腰痛から復帰した横江恵（体育学部4年、滋賀・草津東高校）が同39位と踏ん張ったが、ミスが目立って、団体総合は230・525で10位に沈んだ。

しかし、新チームで迎えた11月の関西学生新人選手権では、個人総合で楢村が1位、杉岡生貴（うぶき、スポーツ科学部1年、兵庫・甲子園学院高校）が2位、池邊和花（わか、同、大分西高校）が3位に入るなど、上位を独占した。

セノーチャレンジカップでも個人総合で梅永恋羽（こはね、スポーツ科学部2年、滋賀・栗東高校）が5位入賞した。

新チームの主将はけがから復帰し最終学年で飛躍を期す蔦愛美（まなみ、体育学部3年、大阪・四天王寺高校）が務める。チームは、地力が高く脚の力強さが持ち味の楢村、主将の梅永、高校2年12月の大けがを乗り越え大学で復活を果たした水野朱華（スポーツ科学部1年、愛知・至学館高校）、西日本インカレの団体メンバーの谷村めぐる（体育3年、滋賀・比叡山高校）らがしのぎを削る。

インカレで2部に落ちた日、選手は涙にくれながら、来季の1部復帰を誓った。田原監督は「飛び抜けた選手がいない分、全体の底上げが必要だ。何よりも、部が同じ目標に向かいワンチームになることが1部復帰のカギ」と意気込んでいる。

水野朱華（スポーツ科学1年、愛知・至学館）
梅永恋羽（スポーツ科学2年、滋賀・栗東）

蔦愛美（体育3年、大阪・四天王寺高校）
楢村莉菜（スポーツ科学1年、大阪体育大学浪商）

剣道部 全日本は中大降し8強 4年ぶり関西V

剣道部男子は9月の関西学生優勝大会で4年ぶりの優勝。11月の全日本学生優勝大会ではベスト8に進出した。

関西学生剣道優勝大会／全日本学生剣道優勝大会

男子 関西学生優勝大会は初戦シードで2回戦から出場し、神戸学院大学に2―1、続く摂南大学に4―1、準々決勝で関西大学に4―0、準決勝で関西学院大学に3―1で勝利。決勝では同志社大学に6―1で快勝した。

村上雷多監督は「関西大会は選手それぞれがやるべきことを頑張った。優勝が決まったあと選手が涙を流して喜んでいるのを見て、一つの目標である関西での優勝を達成できたことをうれしく思った」と振り返った。

11月の全日本学生優勝大会では初戦の環太平洋大学戦を4―1で快勝。続く2回戦では強豪の中央大学と対戦した。先鋒に起用された泉卓磨（体育学部4年、兵庫・育英高校）が勝利し勢いづいたものの、逆転を許し1―2。後がない状況で副将・奥村龍也（体育学部4年、福井・敦賀高校）が勝利し2―2。勝利がかかった大将戦で菊池金太郎（体育学部4年、福岡・福翔高校）が逆胴と返し面を決め3―2で逆転した。その勢いのまま3回戦の慶應義塾大学戦でも5―1で快勝。準々決勝で筑波大学に2―4で敗退となった。

村上監督は「中大戦は気が気ではなかったが、奥村、菊池が期待通りの活躍をしてくれた。奥村は勝ってほしい場面ですごい力を発揮するし、菊池は大将の責任を必ず果たす選手」と評価した。

来季は松原正明（体育学部3年、大分・明豊高校）ら3年生がチームをけん引する。

村上監督は「今年と同じではなく常に新しいことに挑戦してほしい」と期待した。

桑岡孝輔（体育3年、広島・広）　菊池金太郎（体育4年、福岡・福翔）

佐々木俊（体育3年、福岡第一）　奥村龍也（体育4年、福井・敦賀）

関西大会では3位 全日本で強豪破る

剣道部女子は9月の関西女子学生優勝大会で3位。11月の全日本女子学生優勝大会では強豪と2戦し、2回戦で敗退した。

久保晴佳（体育4年、広島皆実）

井上七海（体育4年、大阪・履正社）

関西女子学生剣道優勝大会／全日本女子学生剣道優勝大会

女子 関西女子学生優勝大会は初戦で京都女子大学に5―0、続く武庫川女子大学では2―2、代表者戦で勝利、準々決勝でも園田学園大学に2―0で勝利し準決勝に進出。準決勝では大阪教育大学に0―2で敗れた。

春先に結果が出ず、主将・井上七海（体育学部4年、大阪・履正社高校）、副主将・久保晴佳（体育学部4年、広島皆実高校）が古川智司監督に相談。部員たちと話し合い試行錯誤しながら臨み、大会では優勝を目指していたが、悔しい結果となった。

古川監督は「大阪教育大学には8月の大阪女子学生剣道優勝大会で勝利していたので、良いイメージで戦えたが悔しい。ただし、練習で取り組んだ内容が出て、良くなってきていた」と振り返る。

11月の全日本女子学生優勝大会は、女子のみで集中的に稽古する時間を設けるため、練習時間を夜稽古とし、合宿も行って臨んだ。初戦で九州の強豪、別府大学と対戦。先鋒・橋本凜音（りの、スポーツ科学1年、兵庫・甲子園学院）の勝利で勢いづき、副将・久保、大将・井上が勝利し3―1で1回戦を突破。2回戦では全日本大会優勝の実績もある立教大学と対戦し、橋本が勝利したものの1―2で敗れた。

古川監督は「強豪と連戦となり負けてしまったが、昨年に比べて着実に稽古の成果は出ている。今年、1年生の橋本が実力をつけ切り込み隊長のような役割を果たしている。来季は新チームとなるが、井上、久保ら4年生らと部員たちが相談し決めた練習に自信を持ち、関西大会優勝、全国で入賞を目指したい」と前を向いていた。

橋本凜音（スポーツ科学1年、兵庫・甲子園学院）

原那月（スポーツ科学2年、福岡・福翔）

今枝琴（体育3年、和歌山東）

柔道部 西村、関西大会ベスト8 総力戦で全日本勝利

西村ひかる（体育4年、岐阜・大垣日本大学）

関西学生女子柔道体重別選手権大会／全日本学生柔道体重別団体優勝大会

柔道部女子は8月の関西学生女子体重別選手権大会で57㌔級の西村ひかる（体育学部4年、岐阜・大垣日本大学高校）がベスト8。チームはポイントを稼ぎ10月の全日本学生体重別団体優勝大会に進んだ。

女子 関西学生女子体重別選手権大会で西村は1回戦で武庫川女子大学の選手に延長戦の末、小外刈による技ありで勝利。2回戦は天理大学の選手に内股による技あり、内股返しによる有効で勝利した。続く龍谷大学の選手には敗れたがベスト8となった。

全日本学生体重別団体優勝大会では強化選手を揃えた今大会3位の筑波大学に初戦に0―3で敗れたものの、収穫のある内容だった。

松田基子監督は「強豪揃いの相手に選手はよく戦った。佐々木朱（あかり、体育学部4年、大阪・箕面学園高校）は有効を取り、中本真奈美（体育学部4年、福岡・敬愛高校）、西村ら4年生も引き分けだが内容が良かった。増子和奏（わかな、体育学部3年、東大阪大学敬愛高校）も長身でリーチのある相手に適応し攻め込んでいた」と選手たちをねぎらった。

また、12月は全日本学生柔道YAWARA Challenge Tournamentでは新主将の増子、石塚さつき（スポーツ科学部2年、静岡・藤枝順心高校）がベスト16に入った。特に増子は96名が出場した57㌔級で奮闘し、敗れた試合も松田監督が「勝負にいった」と話す内容で延長含む9分2秒の熱戦を繰り広げた。

また、国内では初めての男女混合試合となるIKAI Christmas CUP第1回全日本学生柔道男女混合団体大会にも増子、石塚、原田詩依菜（しえな、体育学部3年、藤枝順心高校）が出場し、それぞれ勝利した。

松田監督は「団体戦での勝利は自信につながるので、選手に経験してほしかったが、個人では結果が出てきている。特に2年生の石塚は元々寝技が得意だが、立ち技でも一本勝ちし覚醒したかと思う。地力のある4年生たちも引退したが、主将の増子を中心に頑張ってくれると期待している」と話している。

原田詩依菜（体育3年、静岡・藤枝順心）

中本真奈美（体育4年、福岡・敬愛）　石塚さつき（スポーツ科学2年、静岡・藤枝順心）

増子和奏（体育3年・東大阪大学敬愛）

関西学生柔道体重別選手権大会／全日本学生柔道体重別団体優勝大会

柔道部男子は8月の関西学生体重別選手権大会でポイントを稼ぎ10月の全日本学生体重別団体優勝大会に進んだ。

男子 関西学生体重別選手権大会では、66㌔級で久米井遥斗（はると、体育学部4年、香川・高松商業高校）、73㌔級で生南師導（いくなみ・しどう、スポーツ科学部1年、香川・英明高校）、81㌔級で近藤光琉（ひかる、体育学部3年、徳島・阿波高校）、90㌔級で肘井大河（体育学部4年、東海大学付属福岡高校）、100㌔超級で林子昴（はやし、こすばる、スポーツ科学部2年、香川・英明高校）がベスト16入りした。

本大会の競技成績がポイント化され、関西からの出場枠である11校に残り、全日本への出場権を得た。

団体戦となる全日本では、1回戦で東北学院大学と対戦、先鋒・池田孝輔（体育学部3年、宮崎・延岡学園高校）が裏投げで一本勝ち、続く中川宗一郎（教育3年、山口・高川学園高校）も勝利、引き分けを挟み柿木雄翔（ゆうと、教育学部3年、島根・開星高校）も縦四方固めで一本勝ち。ケガを押して出場した大将・久米井は敗れたものの3―3（内容勝ち）で2回戦へ進んだ。

2回戦では強豪の中央大学と対戦し、0―7で敗れた。

また、12月にはIKAI Christmas CUP第1回全日本学生柔道男女混合団体大会に出場。国内では初開催となる男女混合戦で、日本体育大学、日本大学とのリーグ戦、中京大学との決勝トーナメントでは近藤が2連勝し存在感を見せつけた。

生田秀和監督は「東京の強い大学に勝つことがチーム全体の目標。来年度は新入生が10名入部予定で、5月の関西大会に向けて頑張りたい」と話す。

生南師導（スポーツ科学1年、香川・英明）

林子昴（スポーツ科学2年、香川・英明）

肘井大河（体育4年、東海大学付属福岡）

池田孝輔（体育3年、宮崎・延岡学園）

藤江星七（スポーツ科学1年、東海大学付属大阪仰星）

ラグビー部

試合後、長崎正己監督と握手する羽田賢信主将（体育4年、京都工学院）

五度目の正直ならず
「ゴール前の精度」どう高めるか

関西大学ラグビーリーグ入替戦

関西大学リーグAB入替戦が12月、京都市・宝が池球技場で行われ、Bリーグ2位のラグビー部はAリーグ7位の立命館大学に21―57（前半7―31）で敗れた。入替戦は5連敗となり、2019年以来7年ぶりとなる来季のAリーグ昇格は果たせなかった。

Bリーグでは、1次（B1）リーグは5戦全勝で1位。順位決定トーナメント決勝で龍谷大学に17―20で敗れた。

入替戦は立命館大学に3連続トライを許すなど前半で7―31と大差がつく。中盤の地域で反則を犯し、ペナルティタッチキックで自陣ゴール前に迫られた。

羽田賢信（けんしん）主将（体育学部4年、京都工学院高校）は記者会見で「A、Bの差は何かと問われ、（ゴールまで残り）22㍍に入ってからの精度」と答えた。「相手に22㍍ラインに入られると、ほぼスコアを許した。自分たちは攻め込んでもトライを取り切れず、ターンオーバーされた」と悔やんだ。

ラグビー部は2024年の入替戦で、前半で15―0と関西大学をリードし後半、ラストワンプレーで18―19と逆転された。今季はAリーグ5位のチームと勝負できるチーム作りを目指し、「レベル5」をテーマに掲げた。スポーツ心理学の専門家から、個人の力を結集して成果を出せる集団をつくるチームビルディングの指導も受けたが、Aリーグとの差は縮まらなかった。

Aリーグは春季トーナメント優勝の立命館大学が7位に沈むほど実力が伯仲するが、Bリーグは実力差が目立つのが現状だ。その中で、いかに「ここぞの場面での集中力と取り切る意識」を体得するか。チームは模索を続ける。

コロ・ソナタネ（体育3年、青森山田）

山内ディビス（スポーツ科学1年、大阪・成城）

森西貫太（スポーツ科学2年、兵庫・科学技術）

田中一誠（体育3年、大阪・常翔学園）

入替戦制し、涙の1部復帰

関西大学対抗テニスリーグ

女子　テニス部女子は9月の関西大学対抗リーグ2部で全勝優勝し、入替戦で園田学園大学に3―2で勝利。悲願の1部リーグ復帰を果たした。

入替戦は2コートで行われた。まずダブルスの岡村凜那（りんな、スポーツ科学部2年、鹿児島・鳳凰高校）・嶺岸恵（同、宮崎日本大学高校）組、川西由芽（体育学部4年、大阪・浪速高校）・紀之定寿佳（ことか、スポーツ科学部2年、愛媛・済美高校）組が勝ち、2―0とリードした。

続くシングルス2試合。優勢かと思われた岡村は打球が走らず、4―6、4―6で敗れた。嶺岸も第1、第2セットともセットポイントまで行って成長の跡を感じさせたが、5―7、6（7）―7で敗れ、試合は2―2で同点。勝負の行方は3人目に託された。紀之定がアグレッシブに攻めて第1セットを6―0。第2セットは序盤のリードを追いつかれたが、7―5で振り切り、涙の1部復帰となった。

岡村修平監督は主力となった下級生の健闘以上に、1部復帰の要因として4年生を軸に一体となったチーム力を挙げる。4年生は控えに回ってもくさることなく、主将、副主将を中心にチームの理念である「自立・自律したアスリート」であるかどうかを日々、部員に問いかけた。

今季以上の戦力があった昨季は、入替戦で屈した園田学園大のチーム力を痛感した。その反省で、1年かけてチームビルディングに打ち込み、一体感が増した。

来季の目標は、全日本大学対抗王座決定試合の出場。そのために1部リーグ2位以内が必要だ。岡村監督は「1部に上がれて良かったではなく、このままではだめだという意識が部にみなぎっている。そこに期待している」と話している。

紀之定寿佳（スポーツ科学2年、愛媛・済美）

テニス部

無念の2部降格、来季こそ

関西大学対抗テニスリーグ

男子　テニス部男子は9月の関西大学対抗リーグで5戦全敗。入替戦で途中までリードしながら、立命館大学に4―5で逆転負けし、2023年以来の2部降格が決まった。

入替戦はまずダブルス3試合が一斉に行われ、続いてシングルス4試合、同2試合の順で行われる。本学はダブルスで片山稜太（体育学部4年、岡山理科大学附属高校）・成松孝彦（同、愛媛・松山西高校）組、村上慈英（じえい、体育学部3年、福岡・柳川高校）・下林海瑠（かいる、同、大阪・清風高校）組が勝って2勝1敗。シングルスも平山凜太郎（同・鹿児島実業高校）、羽田峻也（体育学部4年、大阪・清風高校）が勝ち、この時点で4―3とし、1部残留に王手。

続くシングルス2試合も片山が第1セットで6―5とした後、40―0でセットポイント、垣内勇星（同、山口・西京高校）も第1セットで5―2とリードし、九分九厘、勝利を手にしたと思われた。

しかし、片山はセットポイントを5回、6回と逃がし、デュースの連続の末第1セットを落とす。垣内はまさかのけいれんに見舞われ、5―7。結局、2人が敗れ、4―5で2部降格が決まった。

チームは、ポイントゲッターの片山、垣内や、リーグ戦で2勝し心境著しい平山らが引っ張ったが、後一歩勝ち切れなかった。宮地弘太郎監督は「もうひと踏ん張りできるためには、もっと試合経験を積むことも必要だ」。来季は大学生大会以外の出場も視野に、いっそうの強化を図る。

村上慈英主将（体育3年、福岡・柳川）

ダンス部

第50回記念公演

Tracing Journey

「ここから」

ダンス部の第50回記念公演が10月24～25日、大阪府高石市のアプラたかいし（たかいし市民文化会館）で開催された。

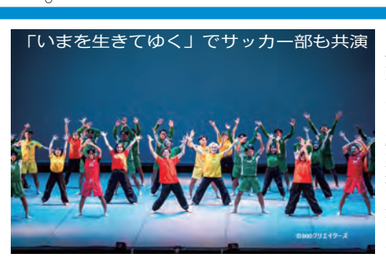
今年度、節目となる第50回を迎えた単独公演は、例年以上に豪華で充実した内容となった。白井麻子部長は、昨年度の単独公演終了直後から企画をスタートし、記念公演に花を添えるため、ダンス部卒業生をはじめ、卒業生が率いるチーム、関西学生舞踊連盟の仲間、さらにダンス部が指導するグループなどに出演を依頼した。卒業生は全国各地から集まり、仕事や家事・育児の合間を縫って練習に励み、本番に臨んだ方も多くいた。

本公演のテーマ「Tracing Journey」は、50回にわたる歴史をたどり、その影響を受けながら変化し続ける〝旅〟を表現したものだ。全15作品、総勢162名の出演者による多彩なステージを通して、観客とともにその旅路を体感する公演となった。

田中結（ゆい）さん（体育学部4年、大阪・樟蔭高校）が作舞・出演を手掛けた「23時56分の自問自答」は音楽の無い無音の作品。田中さんは「私は、何者なのか。明日の私はどうなりたいか。大学生として4年間自問自答してきて、最終的に自分はどういう選択するのだろうかという問いをイメージし作品として形にしました。今回は靴を使用したので、履く履かないという場面の違いを通して、葛藤を表現しました」と語った。

白井部長が作舞した「変化の法則／In Transition」では50年間の単独公演のパンフレット・チラシが映像で流れ、これまでのダンス部の軌跡や歴史を表現しつつ学生・コーチ・卒業生が力を合わせ完成した作品が披露された。

第37回AJDF創作コンクール部門特別賞受賞作品「三角思考Lab」荒智太郎（体育4年、兵庫・芦屋学園）（前）と武藤光由（体育3年、愛知・光ケ丘女子）


「いまを生きてゆく」でサッカー部も共演

アーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマで特別賞「23時56分の自問自答」で演じる田中結

テーマ作品「Tracing Journey」

なぎなた部

全日本学生なぎなた選手権大会／西日本学生なぎなた選手権大会

現メンバーでさらなる高みを

なぎなた部は8月の全日本インカレ団体で3位。前年の1回戦敗退から巻き返し、天川彰子監督は「1年生が4人入部して団体戦の実戦を想定した練習に取り組めたことで、部員の士気が上がった」と振り返った。

団体戦は、今季、けがから復調した神山美完（こうやま・みかん、体育学部3年、愛媛・北条高校）が積極的な攻撃で相手にすきを与えずチームをけん引した。近畿勢との対戦が多く、相手をよく知った試合運びができたことも大きかった。

個人試合でも、男子の枡本新（ますもと・あらた、体育学部3年、新潟青陵高校）が3位。インカレの大会副委員長業務との二刀流となったが、手足の長さを活かした遠間からの攻めが有効だった。

11月の西日本インカレでは、全日本でベスト8だった演技の部で5連覇を達成。西日本から、川口知咲季（ちさき、体育学部3年、和歌山北高校）が神山とペアを組み、高校からの豊富な経験を反映した技の質の高さで頂点に立った。団体の部は準優勝、枡本はインカレに続いて3位と健闘した。

元々4年生不在のため、来季も高溝遥風（はるか）主将（体育学部3年、福井・鯖江高校）以下現メンバーでさらなる高みを目指す。新1年生は来春も、卒業生が指導者を務める高校などからある程度の入部が見込めるという。天川監督は「これまで以上に充実した練習ができる。団体、演技とも優勝を狙う」と意気込んでいる。

神山美完（体育3年、愛媛・北条）

高溝遥風（体育3年、福井・鯖江）

枡本新（体育3年、新潟青陵）

全日本大学サッカー選手権大会

2年連続ベスト8 チーム挙げて協同、育成で好循環

サッカー部男子は全日本インカレで2年連続してベスト8に進出した。予選ラウンド（プレーオフ）で前回準優勝の新潟医療福祉大学に勝利、決勝ラウンドでも関西学生リーグ覇者の関西学院大学を降して1位通過するなど、鮮烈な印象を残した。

長野大河（体育4年、島根・立正大学淞南）

佐藤陽成（体育4年・北海道コンサドーレ札幌U-18）

佐野竜眞（体育4年、広島県瀬戸内）

三島拓人（スポーツ科学1年、立正大学淞南）

男子　新潟医療福祉大学（北信越地区第1代表）とのプレーオフは、0―0のまま延長戦に突入。決着がつかず、勝敗はPK戦に委ねられた。GK長野大河（体育学部4年、立正大学淞南高校）が相手5人目のシュートを見事にセーブし、PK5―4で勝利をつかみ取った。

決勝ラウンド第1節は高松大学（四国地区代表）と0―0で引き分け。続く第2節の仙台大学（東北地区第1代表）戦では、MF野口楓真（ふうま、体育学部4年、静岡・藤枝明誠高校）の先制点を皮切りにゴールを重ね、6―0の大勝を収めた。第3節の関西学院大学（関西地区第1代表）戦では、前半にMF三島典征（てんせい、スポーツ科学部1年、立正大学淞南高校）が決勝ゴールを挙げ、1―0で勝利した。

準々決勝では、今大会優勝校の筑波大学と対戦。前半0―0で折り返したが、後半39分に先制点を許し、0―1で惜しくも敗退となった。

サッカー部男子は部員220人を擁する大所帯で、A～Cの3チーム体制を敷いている。日々のトレーニングや試合でのパフォーマンス次第で昇格のチャンスが与えられ、チーム内競争は常に活発だ。こうした環境の中で成長した選手がAチームに昇格し、筑波大学戦でスタメン出場を果たすなど、育成の好循環が生まれている。

これらの成果は、選手達の日々の努力だけでなく、戦術などの各分野で選手を支えるコーチ陣、試合運営や分析・日常業務を担う学生スタッフのサポートがあって成し得た結果だ。

松尾元太監督は「今は試合に出ていなくても、将来が楽しみな選手が多くいる。一人ひとりの成長を積み重ねながら、大阪体育大学サッカー部全体で、これからも最高の結果を目指していきたい」と、チーム全体に強い期待を込めている。

三島典征（スポーツ科学1年、立正大学淞南）

全日本大学女子サッカー選手権大会

サッカー部

早大の壁破り8強 泥臭く守るサッカー浸透

サッカー部女子は12月の全日本インカレ2回戦で、2年連続で敗れている早稲田大学を0―0、PK4―3で降し、ベスト8に進出した。

北原歩奈（体育3年、山梨・日本航空）

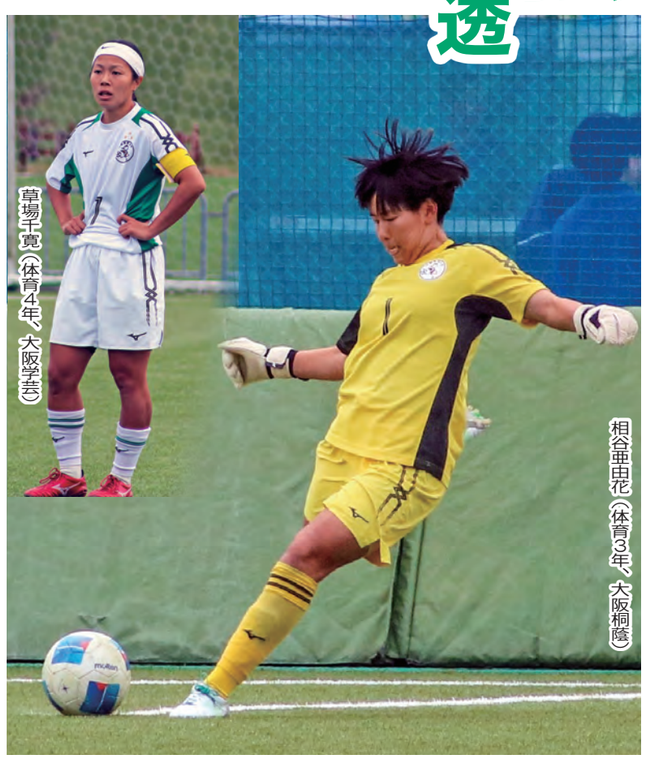
清悠香（体育4年、徳島・鳴門渦潮）

林寿珠里（スポーツ科学2年、大阪桐蔭）

女子　関西第4代表の本学は、1回戦で新潟医療福祉大学（北信越第1代表）と対戦。前半15分、林寿珠里（すずり、スポーツ科学部2年、大阪桐蔭高校）がゴールを決めて1―0で勝利した。

早稲田大学（関東第5代表）には、2年連続して2回戦で敗れた。昨年は1―1で迎えた後半、個人技で強烈なロングシュートを2本決められた。相手の攻撃力をいかに封じるか。選手と指導者で話し合って臨み、試合では、前後半とも、石居亨子監督が「相手の力を吸収して守備をやりきった。準備した通り、前線からしっかり守備ができ、後ろが機能した」と振り返る守備で、早大を無失点に封じる。0―0で迎えたPK戦で、GK相谷亜由花（あいたに・あゆか、体育学部3年、大阪桐蔭高校）が1人目のシュートを右に跳んで弾き飛ばし、5人目のMF北原歩奈（あゆな、体育学部3年、山梨・日本航空高校）がゴールを決めて、PK4―3で勝利。相谷は「組み合わせが決まってから、早稲田を意識してやってきた。目標は日本一だが、この日のために努力してきた」と感無量だった。

準々決勝では、東京国際大学（関東第4代表）に0―2で敗れたが、シーズンを通して、泥臭く守る本学のサッカーを徹底した。関西学生春季リーグはリーグ最少3失点の堅守で5シーズンぶりに優勝。秋季リーグは得点力不足で4位となったが、失点は春をしのぐリーグ最少の2点。石居監督は「今季は、堅守をしながら点を取りにいくことにトライした年だったが、そこはやり切った感がある」と振り返った。



草場千寛（体育4年、大阪学芸）

相谷亜由花（体育3年、大阪桐蔭）

坂ちはるが日本選手権 日本陸連新人賞に

国立競技場のビジョンで坂の表彰が紹介された

日本陸上競技選手権大会

陸上競技の国内最高峰、日本陸上競技選手権が7月、東京・国立競技場で行われ、女子砲丸投げで前年8位の坂ちはる（スポーツ科学部1年、大阪体育大学浪商高校）が15㍍76の自己新記録をマークして優勝。日本陸上競技連盟選出の新人賞を受賞した。

坂は9月のU20東アジア陸上競技選手権大会（香港）で、15㍍25をマークして銀メダルを獲得した。

坂は11月に国立競技場で行われた日本陸連アスレティックス・アワードの場で表彰された。

「来季は日本選手権連覇を目指す。1年生の今季よりももっと海外の試合に出場できるようにトップ選手に追いついていきたい」と話している。